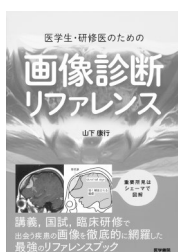


書評

[評者]

徳田安春

群星沖縄臨床研修センター
長



医学生・研修医のための 画像診断リファレンス

山下康行 著

● B5 頁304 2018年3月

定価：本体 4,200 円＋税

[ISBN978-4-260-02880-6] 医学書院刊

診断学において、主要な診断医には、臨床診断医だけでなく、画像診断医や病理診断医も含まれる。いずれのタイプの診断医も、豊富な知識と経験をベースにした、サイエンスとアートの効果的な使い手である。特に、診断困難ケースでは、これら3者の診断エキスパート間の良好なコミュニケーションが正確な診断をタイムリーに行うための必要条件となる。

いずれのタイプの診断医になるにせよ、診断エキスパート間で円滑にコミュニケーションをとるためには、相手方の診断の基本を学習し、そのロジックを理解しておくことが望ましい。例えば、臨床診断医をめざす医師も、画像診断と病理診断の基本を学習しておくことが望ましい。

医学生や研修医の皆さんが、そのような基本部分の学習を行う際には、まず典型例に習熟しておくことを私は勧めている。そんな中、『医学生・研修医のための画像診断リファレンス』が出版された。この本には、押さえておくべき全ての疾患に、最重要ポイント、典型的画像と重要所見のカラフルなシェーマによる図解、そして箇条書きのわかりやすい画像所見解説が記載されている。各疾患で必須の、単純X線、CT、MRI、MRA、エコーなどの画像が網羅されている。臨床と病理サイドとのコミュニケーションを意識した「臨床と

病理」もやはり箇条書きでわかりやすくまとめられている。

従来の書籍では、画像の重要所見をテキストで説明されても、どこの何を指しているのかよくわからないことがあったが、本書のシェーマによる図解を見ることによって、あるサインがどこのどの部分を意味していたのかがよくわかるようになった。

例えば、肺胞蛋白症で特徴的とされている crazy pavement appearance は、従来型の書籍ではCT画像所見に、「小葉間隔壁の肥厚とびまん性のすりガラス影が重なった所見である」とテキストが添えられているのみのことが多かった。半分わかったような、でも半分わかってないような、達成感の乏しい学習で消化不良であった。しかし、本書のわかりやすいシェーマをみれば、どのような所見を指すかが一目瞭然である。

各疾患のコンテンツには、画像上重要な鑑別診断の疾患画像と実際にあったケースの病歴なども記載されている。正確な診断には鑑別診断が重要であり、画像診断において重要な鑑別疾患について効果的に学ぶことができる。医学生や研修医だけでなく、診断に関心のある医師や放射線技師の皆さんにもぜひお薦めしたいリファレンスである。